

タイトル「戦火の杖音」

作者 津島次温

登場人物

・昭和二十年

和子（30才） 盲学校高等部国語教員。

和子の母（52才）

和子の叔母（54才）

木村（60才） 近所の女性

初江（27才） 女性監視哨員

哨長（40才） 防空監視哨

・昭和五十八年

和子（68歳）

明子（35歳） 和子の娘

S E カセットテープを差し込む

M

S E 扉が開く

明子「こんにちは。お母さん、ここに居った
ん」

和子（98歳）「ああ、明子。いらっしやい」

S E レコーダのストップボタン

M C O

明子「なんぼ呼んでも返事がないし、どこに
居るんかと思たら、音楽、聞いてたん」

和子「ええ。なんかな、これを読んだらこ
の曲を聞きたくなっとな」

明子「何を読んだん」

和子「古い文集や」

明子「文集？」

和子「机の中を整理しとったら出てきたんや。

私が盲学校の教員になってすぐの頃、初等科の子供が書いた文集や。なんか捨てられへんかってなあ」

明子「なんか思い出が有るの」

和子「いいえ。思い出なんていう、エエモンやないねん」

明子「ふうん、何が書いてあるの」

和子「……これ読んでみ」

明子「この作文？」

和子「ええ」

明子「ええっと……『支那にいらっしゃる兵隊さん、お国のために、私たちのために働いてくださることを喜んでいきます。毎朝、朝会で、校長先生に戦争のお話を聞きます。どうぞ……え……』」

和子「つづけて」

明子「どうぞ、支那人をたくさん殺して、良い人にしてあげてください……兵隊さんが達者でいて下さるよう、お祈りしています」

和子「それ、初等科の一年生の子の作文や」

明子「え、初等科一年。でも、学校の作文で『殺す』って」

和子「その頃は太平洋戦争の真っ最中やっとな。それが普通やったんや。みんなが、『お国のために』という言葉を使うとった時代やから」

明子「お国のため」

和子「そうや。お国のために働けへん人はホンマに肩身の狭い思いをせなあかんかった。私もその一人や」

明子「お母さんが」

和子「私は、ほら、目が見えへんやろ。せやから普通の人みたいに戦争に協力出来へんかったからなあ」

明子「お母さん」

和子「明子、聞いてくれる？あの頃の話を」

SE 軍歌

SE 杖を突く。リズムカルに。

泥が体にぶつけられる

杖の音が止まる

和子「きゃっ！」

S E 子供たちの笑い声

走り去り、遠ざかっていく

和子「（溜息）」

S E 杖の音

S E 引き戸が開く

和子「ただいま」

母「おかえり、和子。早かったなあ」

和子「うん。今日は授業が半日になって。教

員も早よ帰るように言われたんや」

母「そうか。あら、あんたどないしたん。服

がドロドロ」

和子「大丈夫。何でもないねん」

母「何でもないことないやろ、こんな汚れて。」

あ、またこの辺の悪ガキの仕業やな」

和子「大丈夫やって。私は何にも気にしてないから。あの子らが悪いんとちゃう。私のせいやから」

母「和子」

和子「今は国民総動員でお国の為に働かなあかん。そういう時やのに、私は」

母「とにかく上がり。ほら、着替え、持ってきてあげるさかい」

和子「ありがとう」

S E 廊下を歩く

和子「お母さん、盲学校、明日から休校になった」

母「休校」

和子「どこの学校もみんな学徒動員でお国の為に働いているときやから。盲人は兵隊に

はなれへんし、工場で働くんも難しい。それやったら、せめて自分らにできることでお国の為に働けて。按摩ができる人は按摩で、楽器が弾ける人は楽器を持って兵隊さんの慰問へ行けて。昨日、兵隊さんが来てそう言うたそうや」

母「そうなんか」

和子「お母さん、私、明日からやるのがなくなつた。私は、按摩も楽器もできへん。できるんは国語を教えることだけ。目の見えへん子供たちに点字の読み方を教えてあげることくらいしか、私にはできへん」

母「あんたが点字を教えてあげてるさかい、目の見えへん子供も天皇陛下のことや、兵隊さんのことを勉強できるんや」

和子「そんなん、お国の為に働いてるとは言えへんよ。この前、町を歩いと思ったら女子挺身隊の人たちが練習してる声が聞こえてきた。あの人らに比べたら私なんか。泥団子、ぶつけられても仕方ない」

母「和子」

和子「仕方ないんや」

S E 軍歌

商店街の雑踏

木村「あ、和子ちゃん、和子ちゃん」

和子「あら、木村さん？どうしたんです」

木村「どうしたもこうしたもあらへん。大変やで。今朝、この辺り一帯に疎開票が貼られたんや」

和子「疎開票？」

木村「知らへんのかいな。建物疎開や。この辺り一帯の建物を間引くんや」

和子「建物疎開？間引くってどういうこと？」

木村「この西堀川沿いの家をみんな取り壊すいうことや」

和子「そんな、なんで」

木村「一月に東山で空襲があつたやろ。今度は御所あたりが狙われるんちゃうかて言わ

れとるんや。せやから空襲で燃えた家から
火が燃え広がらんように、先に御所の周り
の家を無くしてしまいうことや」

和子「そんな」

木村「あんたの家にも貼られてたで、疎開票」

和子「え」

木村「早よ帰ってあげ。お母さん、びっくり
してるはずやで」

S E 玄関の開き戸を開ける

和子「お母さん！お母さん、居る」

母「ああ、和子か。おかえり」

和子「今、木村さんから聞いた。疎開票、ウ

チにも貼ってあったん」

母「（溜息）」

和子「お母さん」

母「仕方ないわ。お国の為やからな」

和子「そんな」

母「一週間後に取り壊しが始まるそうや」

和子「え、一週間って急すぎるやん。お父さんにはどうやって伝えるん。もう日が無いで」

母「舞鶴へ手紙を送るわ」

和子「お父さんの仕事道具、どうする？ 勤労奉仕が終わって帰ってきたら、また帯を織るって、お父さん、そう言うて舞鶴に行つたのに」

母「治夫おじさんに相談しよう」

和子「おじさんに」

母「おじさんとは出水にあるから。ここから近いし、お父さんの実家や。織りの道具も預かってもらえるかもしれへん」

和子「でも、おじさんとは」

母「もう日があらへん。どうせそんな遠くへは引つ越せへんし。今、頼れるとこつていうたら治夫さんとしかないわ」

和子「叔母さん、助けてくれるやるか」

母「大丈夫や。こんな時やし、お国の為の疎開や。きつと助けてくれはるって」

和子「やと、ええんやけど」

M 軍歌

節子「この部屋があんたらの部屋や。これだけあつたら、二人で寝て、食べるくらいはできるやろ」

母「節子さん、ありがとうございます」

節子「まったく。こっちはエエ迷惑やわ。あんたら、建物疎開で立ち退いたんやったら、役所からなんぼか手当がもらえるんやろ」

母「ええ」

節子「治夫さんが言うから住むとこだけは貸すけど、食べるもんは自分らで何とかしてや。ウチはあんたら養うような余裕はあらへんで」

母「分かりました」

節子「和子ちゃん」

和子「はい」

節子「あんた、何ができるんや」

和子「何って」

節子「家のことは何か手伝えるんか」

和子「はい。できることは手伝います」

節子「そんな目エでか。期待はせんとくわ」

和子「……ごめんなさい」

節子「まったく、ええ迷惑や」

S E 節子、出ていく

母「和子、気にせんでええからな」

和子「うん」

S E 建物疎開。

柱が折れ、家が崩れ落ちる。

和子「お母さん、あの音」

母「ええ、家が、倒れた」

S E 倒壊する家。

学生たちの笑い声。

母「まだ学生やな、あの子ら。無邪気に笑うて」

和子「お父さんの仕事道具、あかんかったね」

母「ええ」

和子「仕方がないよね、お国の為やから」

母「……ええ」

S E 建物が崩される。

作業する男たちのざわめき。

母「そしたら、行ってくるな」

和子「気を付けて」

母「和子、あんたひとりでホンマに大丈夫か」

和子「うん。平気や」

母「節子さんの言うこと、気にしたらアカン

え」

和子「分かってるって」

母「ほな、できるだけ早よ帰ってくるからな」

和子「いってらっしゃい」

S E 玄関を開ける

節子「お母さん、どこへ行ったんや」

和子「滋賀に知り合いが居って。野菜を分けてもらいに行きました」

節子「そうか。あんなあ、あんまり壁をベタベタと触らんといてくれるか。歩けへんのやったら、部屋でじつとしといて」

和子「すいません」

S E 叔母の足音。遠のいていく。

節子（家の外）「あら、奥さん、この間は大変やったなあ。そうそう、堀川京極の建物疎開で。なんや、あの辺の人らがこっちに移ってきて、ややこしいなあ。え？ そうなんよ。治夫さんの弟さんところがな。行く宛てが無いと言うし。私は反対したんやで。自分とこの食べるもんも困ってんのになあ。」

治夫さんは置いてやれって、簡単に言うけど。あの人、ヤミ市の値段がどんな高いかわかってないんや。……え？そう、そうやねん。娘は盲人やろ。ホンマ、穀つぶしの親子やで」

和子「穀つぶし。私は何にもできへん、穀つぶし。そんなん、もう嫌や。何かやりたい。お国のために私ができること。何？何が有るん。……あ」

S E 敵機爆音集

母「ただいま。ほら、少ないけど、野菜、分けてもらえたで。……和子、これ、何を聞きよるん？」

和子「敵機爆音集や。盲学校で使ってた」

母「物騒なレコードやな。こんなん聞いてどうするん」

和子「お母さん、私な、防空監視哨員になろ

うと思う」

母「防空監視」

和子「警察本部の屋上に防空監視哨があるんや。私、そこで働こうと思う」

母「防空監視て。あんたは目が」

和子「目は見えへんけど、音は聞ける。私、思い出したんや。前に点字新聞で能登の防空監視哨員のことを読んだの。音で敵機を見つける盲人監視哨員が居るって。私もやってみようと思う」

母「そやけど、あそこは警防団の人らに取り仕切ってて男の人ばかりなんとちゃうか」

和子「そんなことない。今は男手が少なくて、女の人も防空監視に立ってるって」

母「和子」

和子「お母さん、私、働きたい。お国の役に立つことがしたい」

母「あんた、無理してへんか」

和子「今のままやったらお母さんに迷惑がかかる。私が役に立たへんかったら、お母さ

んまでみんなから役立たずって言われてしまう。そんなん、もう嫌なんや」

母「和子、ありがとう。でもな、そんな心配せんでええ。私は大丈夫や。それにな、おとうさんは織物の仕事を辞めて舞鶴の工場で勤労奉仕してくれてはるやろ。私らは贅沢もせずに配給で何とかやってるし、建物疎開にも協力した。それにあんたは盲学校で子供たちに兵隊さんの話を聞かせてあげてきたやないの。我が家はみんな、お国の為にできる限りのことはやってるんや。せやから、そんな悩まんどき」

和子「お母さん……。でも私、防空監視をやってみる」

母「和子」

和子「ここでじっとするのは嫌なんや」

母「そうか。分かった。けど、無理はせんようにな」

和子「うん。ありがとう」